「救い主がベツレヘムでお生まれになった秘密」

～辺境から平和がやって来る～

ミカ書５章 1～5 節　讃美歌 111、95

1 エフラタのベツレヘムよ、お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために、イスラエルを治める者が出る。彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる。2 まことに、主は彼らを捨ておかれる、産婦が子を産むときまで。そのとき、彼の兄弟の残りの者は、イスラエルの子らのもとに帰って来る。3 彼は立って、群れを養う。主の力、神である主の御名の威厳をもって。彼らは安らかに住まう。今や、彼は大いなる者となり、その力が地の果てに及ぶからだ。4 彼こそ、まさしく平和である。アッシリアが我々の国を襲い、我々の城郭を踏みにじろうとしても、我々は彼らに立ち向かい／七人の牧者、八人の君主を立てる。5 彼らは剣をもってアッシリアの国を、抜き身の剣をもってニムロドの国を牧す。アッシリアが我々の国土を襲い／我々の領土を踏みにじろうとしても、彼らが我々を救ってくれる。

ルカによる福音書２章 1～15 節

1 そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。2 これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。3 人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。4 ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。5 身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。6 ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、7 初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。8 その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9 すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10 天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。12 あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」13 すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。14「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。」15 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。

■　本論

アドヴェント第三の週に入りました。

この朝もまた旧約聖書に記されたイエス様のお姿を見つめいきたいと思います。

イエス様がお生まれになったのは、ベツレヘムという小さな村でした。

今日の関心は、どうしてベツレヘムであったんだろうということです。

イエス様がお生まれになった時代は、ルカ福音書が記しますように、皇帝アウグストゥスの時代です。すなわち、ローマ皇帝が地中海世界にその支配を広げている時代です。そうであれば、救い主の誕生は帝国の首都ローマでもよかったのではないか。

ローマから見れば、ベツレヘムというのは東の果て、地の果てです。

文明の光が届かない場所です。

どうして、そのような場所から、世界の救い主がお生まれになる必要があったのか。

あるいは、もう少し近くと言いましょうか、せめてイスラエルの都エルサレムでもよかったのではないか。ユダヤ人の王としてお生まれになるのであれば、エルサレムこそがふさわしかったのではないか。どうして、ベツレヘムであったのか。
そこに、どのような意味が込められているのでしょうか。

いや、そこに深い意味はないと言われるかもしれません。
が、そうではない。決してそうではない。福音書記者たちはこぞって、救い主がベツレヘムでお生まれになったということに、特別な意味を見出しています。
今朝は、ルカによる福音書をお読みしました。4節にこう記されていました。
ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。
ここでルカによる福音書は一つの作業をしています。
それは、ベツレヘムと「ダビデの町」とを結びつけるという作業です。
福音書は、ベツレヘムこそがダビデの町であると言うんです。

しかし、通常、「ダビデの町」と言いますと、それはエルサレムのことです。
旧約聖書が、「ダビデの町」と呼ぶとき、それはすべてエルサレムのことです。
ついでに言いますと、旧約外典においてもそうです。
第一マカバイ記に「ダビデの町」という言葉が出てくるんですけれども、いずれもエルサレムのことを指して言われています。
そこに、ベツレヘムが入り込んでくる隙間はありません。

ルカをはじめ福音書を書いた人たちは当然、そのことを知っています。知っていて記しているんです。「ダビデの町」は、エルサレムではなくベツレヘムだと。
そこに、救い主はお生まれになったのだと。

ですから、11節をご覧ください。主の天使が羊飼いたちに語りかける、こんな言葉がありました。***今日、ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。***
旧約聖書の感覚ですと、羊飼いたちは、エルサレムに行かなければいけない。
しかし、彼らが向かうのは、ベツレヘムです。羊飼いたちは言っています。***「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」。***
ダビデの町はベツレヘムである。
そこに、救い主はお生まれになった。
そこに、羊飼いたちは向かう。
そこに、福音書記者は明確な意味を見出しています。
今朝は、その意味を探っていきたいのです。

さて、旧約聖書のなかで、救い主がベツレヘムでお生まれになるということを記しているのは、今日、お読みしたミカ書5章です。

ミカという預言者は、イザヤとほとんど同じ時代に生きた人です。
イザヤという預言者がエルサレムの王や祭司たちという指導者層、貴族層とある意味では同じ目線に立って、彼らの腐敗を指摘したのに対しまして、ミカという預言者は社会の底辺に住む人たちと同じ目線に立ちまして、社会の不正や暴力のもとに庶民が搾取されていく様を見つめています。
ミカ書２章の初めにはこういう言葉があります。
***1** 災いだ、寝床の上で悪をたくらみ、悪事を謀る者は。*
夜明けとともに、彼らはそれを行う。力をその手に持っているからだ。
***2** 彼らは貪欲に畑を奪い、家々を取り上げる。*
住人から家を、人々から嗣業を強奪する。

預言者ミカはこの様子を見ているんです。高みの見物ではありません。
ミカ自身が奪われる側に、強奪される側に、抵抗する力を持たない側にいる。
そのような貧しい人、低い人であるミカに与えられた救い主の預言が５章でした。
***1** エフラタのベツレヘムよ、お前はユダの氏族の中でいと小さき者。お前の中から、わたしのために、イスラエルを治める者が出る。*

神の言葉は、ベツレヘムという小さな村を擬人化して、呼びかけているんですね。
お前の中から、神である*わたしのために、イスラエルを治める者が出る。*
不正がまかりとおるエルサレムでもない。サマリアでもない。
救い主は、人間の力によって奪われる側、強奪される側にある小さな村ベツレヘムから出る。ベツレヘムから救い主が出るということが、神が低き者の側に立つというしるしになります。

この預言が大切であるのは、救い主の生まれる場所が単にベツレヘムであると指名されていることに留まりません。その意味が何より大切です。
ベツレヘムが華やかな、それゆえにこそ人間の力や思惑が渦巻く都ではなくて、小さな村であったということです。強奪される側の村であったということです。
神は、その地を救い主誕生の地とされる。
そうすることで、神は低き者の味方だという御自身の在り方をあらわされる。

ミカ書５章３節にはこういう言葉もあります。
彼は立って、群れを養う。
ここにあるのは、羊飼いのイメージです。
羊飼いが羊を養う。羊を一つの場所へと導いてゆく。
主は羊飼い。神こそが羊飼い。それは旧約聖書でしばしば用いられるモチーフです。
神は、羊のように力弱く、すぐに道に迷う私たちを導いてくださる。
救い主は、そういう神の力をもって、*主の力、神である主の御名の威厳をもって*、羊飼いとして、低き者たちを導いてくださる。
だからこそ、*彼らは安らかに住まう*ことができる。
まるで、青草の原に休むように、憩いの水のほとりで魂を生き返らせるように。

実際に、生きている現実は「死の陰の谷」をゆくような、いつも緊張感が強いられ、いつも切迫感に追われ、生きた心地をしない日々にあっても、しかし、「わたしは災いを恐れない」と言えるような勇気を与えてくれる存在。

それが、ベツレヘムに生まれる救い主です。

今や、彼は大いなる者となり、その力が地の果てに及ぶからだ。彼こそ、まさしく平和である。とも言われている。

小さな村に生まれ、小さな者として生きて、だからこそ、主の力によって大いなる者とされる、その力を地の果てにまで及ばせる。

それが、ベツレヘムに生まれる救い主だというんです。

その救い主がベツレヘムでお生まれになった、ミカの預言が成就したと福音書が記すとき、それは同時に、神は奪う側の見方ではない、奪われて心を低くする者の味方であると語っていることになります。

救い主はエルサレムではなく、ベツレヘムでお生まれにならなければいけなかった。

神が、小さな者の味方であると世界に宣言されるためです。

そしてまた、そこに、福音書がベツレヘムをダビデの町と呼んだ理由もあります。

救い主がダビデの子孫、ダビデの子として来られる。

このことは次週のテーマとなりますけれども、当時の人たちに共通した認識でした。

救い主はダビデの子として来られる。

問題は、どのようなダビデであるのか、です。

イスラエル王国の礎を築いた偉大な王としてのダビデであるのか。また、イスラエルの悲願でありました強敵ペリシテを打倒した武将としてのダビデであるのか。

人びとは自分の願望を重ねながら、救い主がどのようなダビデとして来られるのかを思い巡らしました。

その救い主がベツレヘムでお生まれになった。

すなわち、その救い主は、エルサレムのダビデのようにではなくて、ベツレヘムのダビデのような方である、ということを意味しています。

エルサレムのダビデは王です。ダビデはエルサレムで全イスラエルの王になった。

もちろん、救い主には王という側面もある。油注がれた王という側面もある。

が、その王という意味さえも変えてしまうほど、救い主にとって最も大切な姿は、土台となる姿は、ベツレヘムのダビデのものです。

ダビデはエルサレムで王になった。

それでは、ベツレヘムにいた頃は何をしていたのか。

ダビデはまだ少年でした。

そして、お父さんエッサイのお手伝いとして羊飼いをしていました。

ベツレヘムのダビデは、文字通り小さな人で、羊飼いでした。

ダビデは八人兄弟の末っ子です。お兄さんたちは、既に軍人として王様サウルに従って戦争に出ているんですね。バリバリと社会の第一線で働いている。

けれども、ダビデはと言いますと、竪琴を奏でるのが趣味でして、兵士になるとい

うことにあまり乗り気ではなかった。兵士になったかと思えばすぐに止めて親元に帰って来る。それでも働かなければとサウルのところに行くんですけれども、またすぐに帰って来て羊の世話をする。少年ダビデはなかなか不器用と言いますか、社会が求める在り方に生きづらさを覚えている、そういう人物であったようです。
　そういうダビデでありましたので、預言者サムエルが、イスラエルの新しい王を求めて、エッサイのもとを訪ねました時も、エッサイは食事の席にダビデを呼んでいませんでした。父親の目から見てもこいつはダメだろうという思いがあったのでしょう。
　その時、ダビデは羊の番をしていた、というんです。
　ダビデは、肩身の狭い思いをしていたんです。こいつは見込みがないと思われていたんです。役に立たない。家の中に居場所がなかった。
　ですから、新しい王が選ばれる、その食事の席にも、ダビデは呼ばれることなく、羊の番をしていました。そのダビデを神は選ばれました。人間は見抜けなかった、親もダメだと思ったダビデを、神だけが選ばれたのです。
　それが、ベツレヘムのダビデです。

　このダビデだと福音書は言うんです。福音書は、救い主が「ダビデの子」であるという場合、それはまずもって「ベツレヘムのダビデ」であると言いたい。
　この世界に居場所を持たずに、羊飼いをしていた低きダビデである。
　そのダビデが、主の御力によって、ただ主の御力によって、王へと導かれた。
　ダビデは最初から王であったわけではありません。
　彼の出発点は羊飼いです。この世界に居場所を持たない少年です。
　その少年が神の力によって、この世界に居場所をつくり、隣人たちとの平和を築いていった。出発点は何も持たない羊飼いでした。
　それが、救い主の出発点でもあります。
　いと小さき者が、主の御力によって、大いなる者とされる。
　大いなるとされるのであって、本人は小さい者であり続ける。
　それが、神の民の歩む道筋なんです。
　そのモデルが、ダビデにあり、救い主にある。
　救い主の出発点は、エルサレムのダビデではない、ベツレヘムの羊飼いダビデです。

　このことを語るために、ルカ福音書は「ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った」と記しました。
　救い主の出発点は、ベツレヘムのダビデであるということです。
　ベツレヘムを「ダビデの町」と呼んでも間違いではない。
　ベツレヘムは、ダビデの生まれた場所ですから。ダビデの育った場所ですから。
　ベツレヘムは、確かに「ダビデの町」ではあるんです。
　ふさわしくそうであるんです。そこに、本当のダビデの姿があると言っていい。
　サムエル記上 17 章 15 節に、ダビデが「ベツレヘムの父の羊の世話をしていた」という記述があります。それが、ダビデの生き方だったんです。図らずも王へと押し出されていきますけれども、音楽を奏でながら父の羊の世話をする。
　それが、ベツレヘムのダビデでした。

そのダビデのイメージをイエス様はそのまま身にまとわれています。イエス様は言われます。「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」（ヨハネ 10 章 14 節）。それが、ベツレヘムでお生まれになった救い主のお姿です。ミカが指さした「***彼は立って、群れを養う***」救い主のお姿です。

神様がお送りくださった救い主は、こういうお方ですから、最初に招かれるべき者が、羊飼いたちであった、ということは極めて正当なことでした。

羊飼いたちが、当時の社会の底辺にいたということもそうですけれども。

世の中が人口調査ということで、人びとが自分の生まれた町に、村になだれ込んでいるなかで、羊飼いたちはその必要がなく野宿をしている。社会の営みののけ者にされている。少年ダビデのように、役に立つ人間の頭数に入れない。そういうこともそうですけれども。

羊飼いたちは、救い主の同僚なんです。仲間なんです。同労者なんです。

小さき者として、神の御力によってのみ、高められる。

この羊飼いこそ、救い主誕生の夜に招かれるにふさわしい客はいません。

彼らに最初のクリスマスが告げられます。

今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。

羊飼いたちは、この言葉を文字通りに受け取ることがゆるされます。

「あなたがたのために」。本当に「あなたがたのために」なんです。

神の言葉と、自分との間に、何も邪魔するものがない、何の解釈も用いる必要もない、そのまま受け取ることができる。これほどの幸いはない。

神の言葉が自分に語られている。神の言葉と一つになれる。これほどの幸いはない。

わたしたちにもその道が開かれています。

わたしたちの多くは今から羊飼いになることは難しい。

しかし、ベツレヘムという言葉が求めるところに立つ道が開かれている。

ベツレヘムのダビデは何も持ちませんでした。小さく、貧しい者でした。

彼にあったのは、神からのあたたかい眼差しだけです。

小さな者のところに、小さな者として救い主は来てくださいます。

「あなたがたのために」です。遠くの町エルサレムにではない。

他の誰でもない、低きあなたのために、救い主はお生まれになった。

わたしたちのベツレヘムに向かいましょう。

お祈りをいたしましょう。

■　*祈り*

今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。
この方こそ主メシアである。

■　*静止の時*

『子どもと親のカテキズム』

問３２　祭司(さいし)としてのイエスさまのお働(はたら)きは何(なん)ですか。

答　　イエスさまは、祭司(さいし)として、私(わたし)たちの罪(つみ)のつぐないのためにご自分(じぶん)の命(いのち)を十字架(じゅうじか)でささげてくださいました。今(いま)も、天(てん)にあって私(わたし)たちのためにとりなしていてくださいます。ですから、私(わたし)たちは、キリストの名(な)によって心(こころ)をこめてお祈(いの)りします。

「油注がれた者」であるイエスさまの二つ目のお働きは、祭司としてのものです。

旧約聖書における祭司の役割は、神様と民の間に立ちまして、神様と民とを結びわせることでした。本来、交わり得ない神と人間とを、神にゆるされる範囲のなかで結び合わせる。それが祭司の役割でした。そのことは、主に儀式をなすことで果たされました。

祭壇に動物の犠牲を献げまして、神様の祝福に対する感謝や、あるいは民の犯した罪に対する赦しが祈り、願われました。

祭司としてのイエス様は、動物を献げるということはされませんで、御自身を献げられます。イエス様のご生涯全体が、神の愛をあらわすための神様に献げられたものであると言えます。その到達点が十字架です。十字架において、イエス様は、私たちの罪の償いの犠牲として身を献げられる。神の怒りを、神の呪いをすべて身に引き受けられて、神とわたしたちとを結び合わされるのです。

そして今も、聖霊において私たちと共にいてくださいます。

ですから、私たちは祈るときに、「主イエス・キリストの御名によって」とイエス様のお名前で祈る。その祈りだけが神様に届くからです。イエス様だけが神様と私たちを結び合わせてくださるお方だからです。